

## 「キキビソ」考

A consideration over “kikibiso”

中澤 光平\*

NAKAZAWA Kohei

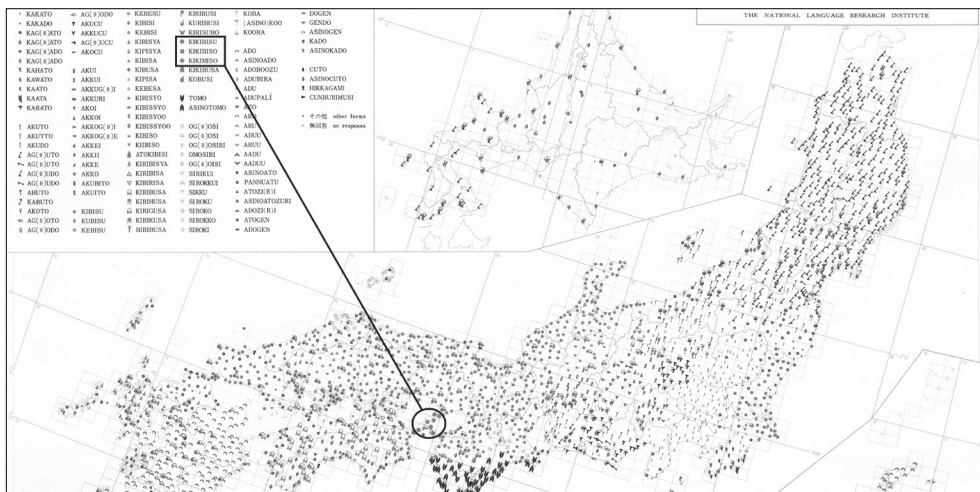
淡路方言で「踵」を意味する〔キキビソ〕は《きびす》に対応する形式だが、どのような音変化を経て成立したかは明らかではない。本稿では、〔キキビソ〕が《きびす》のより古い形式《きひびす》から、第2音節の子音がP>Kと変化したという、一見不自然な音変化を仮定する。類似の変化を検討することで、音変化の類型の一つとしてA-B-B>A-A-Bというタイプの存在を提唱し、その妥当性を論じる。また、A-B-B>A-A-Bという変化は、子音の通常の音変化とみなすことはできず、「空のスロット」“□”および「スロットがあるだけで中に何もいない場合、直前の音をコピーする」という規則を認め、A-B-□>A-□-Bのように空のスロットに子音が移動し、あたかもメタテシスのように見えるという分析が最も合理的であることを示す。

キーワード：音変化、重複形、メタテシス

### 1. はじめに

兵庫県の淡路島および属島の沼島（ぬしま）で話される方言を淡路方言という。淡路方言に特徴的な語の一つに〔キキビソ〕があり、「踵」を意味する<sup>1</sup>。「踵」を〔キキビソ〕というのは淡路方言に限られる（図1）。

図1 〔キキビソ〕の分布（『日本言語地図』第129図「かかと（踵）」より一部加工）



\* なかざわ・こうへい、埼玉大学大学院人文社会科学部研究科非常勤講師、言語学・方言学

<sup>1</sup> 興津（1990：82）。他に〔キキビス〕〔キキミン〕のような変異形があるが、〔キキビソ〕で代表させる。

〔キキビン〕は、意味と音の類似から《きびす》に対応すると考えられる。『日本国語大辞典 第二版』（以下、「日国」）には、「きびす【踵】」の〈なまり〉として、

- (1) キキビン〔淡路〕 キビサ〔島根〕 キビシ〔鳥取・岡山・広島県〕 キビシヤ〔島根・広島県・伊予大三島・福岡・壱岐〕 キビシヤ〔和歌山県〕 キビシヨ〔栃木・広島県・対馬・壱岐〕 キビセ〔広島県〕 キビン〔新潟頸城・岐阜・飛騨・淡路・紀州・鳥取・広島県〕 クビス〔徳島〕 ケイブシ〔八丈島〕 ケビス〔富山県・石川〕

が挙げられている（4:242。下線は筆者による）。また、《きびす》のうち、「踵」の意味の方言として、

- (2) ◇ききびそ 兵庫県淡路島 671 ◇きびさ 島根県 725 広島県比婆郡 774 高田郡 779 ◇きびし 兵庫県赤穂郡 661 鳥取県西伯郡 719 島根県出雲・隠岐島 724 岡山県 752 759 768 広島県 771 香川県 829 愛媛県上浮穴郡 840 ◇きびしや 久留米†127 和歌山県日高郡 690 島根県 725 広島県南部 771 愛媛県島嶼 840 福岡県 872 876 長崎県 899 910 914 ◇きびしや 佐賀県藤津郡 895 ◇きびしよ 茨城県真壁郡 188 栃木県 198 新潟県西頸城郡 382 大阪府泉北郡 646 和歌山県日高郡 698 広島県賀茂郡・倉橋島 771 徳島県 811 長崎県 902 913 914 ◇きびせ 広島県大崎上島 054 御調郡・神石郡 771 ◇きびそ 新潟県西頸城郡 385 富山県東礪波郡 402 岐阜県 497 498 兵庫県淡路島 671 和歌山県日高郡 698 鳥取県 711 広島県賀茂郡・甲奴郡 771 香川県 827 高松市・小豆島 829 ◇きびつしよ 長崎県東彼杵郡 052 ◇きびりさ 香川県木田郡・香川郡 829 ◇きぶさ 徳島県 811 美馬郡 054 ◇きぶす 香川県木田郡 829 ◇きりうさ 香川県屋島 054 綾歌郡 829 ◇きりぐさ 香川県綾歌郡・三豊郡 829 愛媛県 840 ◇きりびさ 香川県 829 愛媛県 840 ◇きりびし 香川県広島 054 ◇きりびしや 香川県大川郡・綾歌郡 829 愛媛県 840 ◇きりびしよ 香川県 829 ◇きりぶ 愛媛県喜多郡 840 ◇きりぶさ 徳島県 811 美馬郡 054 阿波郡 819 香川県 827 愛媛県 840 高知県 860 高知市 867 幡多郡 878 ◇きりぶし 香川県 054 829 ◇きりわぐさ 愛媛県温泉郡 840 ◇けびす 石川県珠洲郡 408 河北郡 414 ◇けべす 富山県 390 砺波 398

が挙げられている<sup>2</sup>（4:242。下線は筆者による）。

このように、〔キキビン〕が《きびす》と関連があることは明らかであるが、語頭が〔キキー〕で始まる形式は他に見られず<sup>3</sup>、どのような音変化<sup>4</sup>を経て〔キキビン〕という形式が成立したかは明らかではない。〔キキビン〕と《きびす》の大きな違いは語頭で〔キ〕が重なっている点であり、その由来を説明する必要がある。本稿では、語頭の〔キキー〕に着目し、〔キキビン〕という語形の成立過程についての説明を試みる。

<sup>2</sup> 地点名の後ろにある数字は典拠となる方言資料の出典番号である。例えば、兵庫県淡路島の 671 は田中（1934）を指す。

<sup>3</sup> 厳密には、『日本言語地図』第 129 図の鳴門に〔キキブサ〕があるが、淡路方言との接触によるものと考えられる。

<sup>4</sup> 音変化とは、「言語の音声面で起こる通時的な変化の総称」（『言語学大辞典』6:172）である。通時的とは、「ラングが時間の流れに沿って、つまり歴史的にどのように発展変化したか、あるいは変化の規則性があるかどうかなどを扱う部門」（同上:947）である。ラングとは、「特定の言語社会に属するすべての個人が習得し、慣習として各人の脳裏に記憶されている記号と文法の体系」（同上:1383）である。

### 1-1. 重複による派生の検討

同音が連続するには重複<sup>5</sup>という形態論のプロセスが関わっている可能性がある。「踵」のような身体語彙には、「耳」《みみ》、「腿」《もも》、「頬」《ほほ》、「乳」《ちち》（古くは《ち》）のように語音を重複させた形式が見られる（「踵」《かかと》もその一つ）<sup>6</sup>から、それらの語の影響で《きびす》が〔キキビン〕に転じた可能性がある。しかし、そうであれば他の方言にも類例があるはずであり、淡路方言でのみ《きびす》から重複形が生じたというのは不可解である<sup>7</sup>。また、《ちち》の例があるにせよ、《み》《も》《ほ》《かと》のような語基はなく<sup>8</sup>、身体語彙の重複は生産的とは言えないことから、〔キキビン〕も《きびす》からの重複形と見てよいかは疑わしい。そのため、〔キ〕の重複には、派生<sup>9</sup>のような形態論的ではない変化を考える必要がある。

### 1-2. 古形からの音変化の検討

《きびす》の古形には《くひびす》あるいは《くびひす》という形があった。「日国」には、「くびひす【踵】」として、

- (3) \*書紀(720)仁徳六五年(前田本訓)「其れ膝(ひさ)有りて臙踵(久比婢須)無し」 \*新詠  
華嚴經音義私記(794)「足跟 跟各痕反 下久比比須」 \*新撰字鏡(898-901頃)「跟 踵也  
久比比須」

の文献例が挙げられている(4: 979)。また、《くひびす》より少し時代が下ると、《きひびす》という形式も見られるようになる。「日国」には、「きひひす【踵】」として、

- (4) \*小川本願經四分律平安初期点(810頃)「長老畢陵伽婆蹉、脚の跟(キヒヒス)破けたり」 \*  
享和本新撰字鏡(898-901頃)「{肉+爭} 測丁反 脚筋也 支比々須乃須知与保呂乃須知 脚之  
後大筋」

の文献例が挙げられている(4: 243)。<sup>10</sup>《きびす》は、《くひびす》 > 《きひびす》から重音脱落<sup>10</sup>を経て成立したと考えられるのに対し、淡路方言の〔キキビン〕は、《きひびす》の第2子音が変化して成立した可能性がある。しかし、P>Kの変化<sup>11</sup>は、「鋸」《のほぎり》 > 《のこぎり》や「含む」《くくむ》 ~ 《ふくむ》 ~ 《ふふむ》のように円唇母音/u/、/o/が後続する環境以外では稀であり想定しがたい。すなわち、一般的音変化では《きひびす》 > 〔キキビン〕は説明できない。

<sup>5</sup> 重複とは、「語基の全体または一部を繰り返す形態論のプロセス」(『明解言語学辞典』: 155)である。

<sup>6</sup> 「心」《こころ》、「腕」《ただむき》などもその可能性がある。「女陰」《へへ》などは婦女子語由来か(松本 2018: 86-92)。

<sup>7</sup> ただし、《かかと》は《かと》を基にした重複形の可能性があり、そうであれば〔キキビン〕は孤例ではなくなる。

<sup>8</sup> ただし、《かと》に関して、九州のいくつかの地点に〔カド〕が見られ、《かかと》との関連が考えられる。《ちち》には、「乳房」「乳首」「乳飲み子」のように、語基《ち》が存在する。

<sup>9</sup> 派生とは、「ある語から別の語をつくり出す仕方」(『言語学大辞典』6: 1066)である。

<sup>10</sup> 重音脱落とは、「音連鎖の中で同一または類似した音節が連続した場合に、一方の音節が消失して語形の短縮が起こるような形の音変化のこと」(『言語学大辞典』6: 670)をいう。例えば、England < Engla-land の重複する la の削除など。

<sup>11</sup> 「ハ行子音は、歴史的に [p] > [ɸ] > [h] と変化したと考えられている」(沖森 2010: 21)。

### 1-3. 「重複部分の変化」の検討

「キキビソ」と古形《きひびす》を比べると、重複部分が異なっている。すなわち、[キキビソ]は第1音節と第2音節、《きひびす》は第2音節と第3音節が同音になっている（清濁の違いは無視する）。このような重複部分の変化は、他方言にも類例がある。ローレンス（2006）には、沖縄北部の方言群のうち、金武町屋嘉で「海胆」を *kakasu* といい、これが \**kasusu* に由来することを述べている（115-116）。「海胆」の方言形は、与論 *hacici*、伊是名 *gasisi*、金武町字金武 *kasusu*、久米島真謝 *gacici*、勝連町平敷屋 *kacici* のように、他の方言では第2音節と第3音節が同音になっているが、金武町屋嘉のみ *kakasu* なのは、古く \**kasusu* であったことを予測する。同様に、ローレンス（2019）は、「山羊」の北琉球祖語形として \**pipiza* を再建<sup>12</sup>し、これが日本語の《ひつじ》に対応し、\**pituzi* > \**pitizi* 《ひちじ》 > \**picizi* 《ひちぢ》 > \**pipizi* 《ひひぢ》と転じ、-a が接尾して \**pipiza* ができあがったとする（p.104）。ここでも、《ひちぢ》 > 《ひひぢ》という、重複部分の変化が想定されている。そうであれば、《きひびす》 > [キキビソ] も、P>K という変化ではなく、キヒビ→キキビという重複部分の変化と考えることができる。この変化は「A-B-B>A-A-B」のように定式化できる。しかしながら、「海胆」は周辺方言との比較によって「A-B-B>A-A-B」の変化が起きた可能性が高いものの、「山羊」はあくまで理論的な再建形にもとづいており、淡路方言の周辺に古形と思われる《きひびす》が分布していないことも含め、[キキビソ] に同様の変化が起きた証拠が少ない。

### 2. 「A-B-B>A-A-B」の類例の検討

前節で、《きひびす》 > [キキビソ] は、重複部分の変化「A-B-B>A-A-B」という音変化によって生じた可能性を指摘した。本節では、その妥当性を検証するため、このような変化の類例が他にも認められるかを、いくつかの事例を挙げて検討する。

#### 2-1. 「蟻」《きざさ》《きざし》

「虱の卵」を古く《きざさ》あるいは《きざし》といった。「日国」は「きざさ【蟻】」として、

- (5) \*十卷本和名類聚抄（934 頃）八「蟻虱 説文云蟻（音幾 岐佐々）虱子也虱（所乙反 之良美）齧人虫也」 \*滑稽本・大千世界楽屋探（1817）序「業平でも王莽でも、孔明でも弁慶でも、戯房（がくや）が知れぬで持た物、蝨虫（キサザ）が啼ぬでお造化（しあはせ）ならずや」

の文献例が挙がっている（4: 79）。また、「きざし【蟻】」には、

- (6) \*色葉字類抄（1177-81）「蟻 キサシ 虱子也 キササ」 \*名語記（1275）八「しらみの卵をきざしとなつく如何。蟻也、かみしらしらの反は、きざさとなる。かみしらせりはきざし也」 \*塵袋（1264-88 頃）四「しらみの子をはきざさと云ふ敷きざじと云ふ敷」

<sup>12</sup> 再建とは、「言語の変化、歴史を説明するために有効な形を、実際の資料によって理論的に推定し復元させること」（『言語学大辞典』6: 598）である。再建によって得られた形を再建形といい、星印\*（asterisk）を付けて示す。

の文献例が挙がっている (4: 79)。「きささ【蟻】」の方言には、

- (7) ◇きささ常陸†064 茨城県真壁郡 188 栃木県 198 長野県佐久 493

が挙がるのみだが、「きさし【蟻】」の方言には、「虱の卵」の意として、

- (8) 鹿児島県種子島 054 ◇きさじ 埼玉県秩父郡 251 東京都南多摩郡 310 神奈川県津久井郡 316 新潟県佐渡 352 石川県金沢市 404 和歌山県 690 ◇かがし 徳島県 811 ◇ぎいかし 沖縄県島尻郡 975 ◇きいじゃ 鹿児島県徳之島 975 ◇きかじ 奈良県宇陀郡 680 宇智郡 683 ◇きがし 島根県隠岐島 725 徳島市 811 香川県三豊郡・小豆島 829 愛媛県 840 高知県長岡郡 869 ◇きかぜ 和歌山県和歌山市 690 那賀郡 696 ◇きがせ 香川県伊吹島 829 ◇きさげ 栃木県塩谷郡 201 千葉県東葛飾郡 277 ◇きざし 埼玉県秩父郡 251 石川県能美郡 419 ◇ぎざじ 石川県江沼郡・河北郡 404 ◇ぎざし 鹿児島県与論島 975 ◇きさぜ 和歌山県西牟婁郡 690 日高郡 698 ◇きさだ 栃木県上都賀郡 198 足利市 209 群馬県山田郡 240 佐波郡 243 千葉県東葛飾郡 276 ◇きされ 和歌山県 690 ◇ぎしゃあし 鹿児島県沖永良部島 975 沖縄県国頭郡 975 ◇きしゃじ 東京都八丈島 338 ◇ぎしゃし 鹿児島県奄美大島 974 ◇きしゃだ 山梨県南巨摩郡 463 ◇きしゃで 三重県伊賀 585 ◇ぎっさ 沖縄県宮古島 975 ◇きびす 長野県 054 493 ◇きゃあし 沖縄県奄美大島 975 ◇きゃさあ 鹿児島県喜界島 983 ◇きらざ 茨城県水戸市・那珂郡 188 ◇きらじ 石川県 408 414 422 ◇きらじゃ 茨城県 062 ◇けえさ 沖縄県鳩間島・黒島 996 ◇げえさ 沖縄県石垣島・竹富島 996 ◇けがし 兵庫県淡路島 671 島根県隠岐島 725 徳島県 811 香川県 829 愛媛県 840 高知県 861 ◇けがせ 岡山県小田郡 767 ◇けらじ 石川県 408 414 422 ◇じちやし 沖縄県首里 993 ◇ちゃさあ・ちやし 鹿児島県喜界島 983

が挙げられている (4: 79)。下線、点線は筆者)。注目すべきは、いくつかの地点で《きがし》のように第2子音が/g/や/k/になっている点である。/za/ > /ga/のような音変化は稀だから、これは、K-S-S > K-K-S という重複部分の変化（清濁の違いは無視する）と見るべきであり、「A-B-B > A-A-B」の一例に加えることができる（点線の語形も \*kikasi ~ \*gikasi ~ \*gikasa に遡る可能性がある）<sup>13</sup>。

## 2-2. 「歯茎」《はじし》

「歯茎」の意味の古語として《はじし》がある。これは「歯」と「肉」《しし》の複合語である。「日国」には「はじし【歯肉】」として、

- (9) \*新撰字鏡 (898-901 頃)「斷 歯志々」 \*十卷本和名類聚抄 (934 頃) 二「斷 玉篇云〈魚斤反 波之々〉 齒之肉也」 \*不空羼索神呪心經寛徳二年点 (1045)「或は斷 (ハシシ) 腭 (あぎ) を痛み、或は心胸を痛み」

<sup>13</sup> 《きがし》の方が古く、《きがし》 > 《きざし》の可能性もあるが、ここでは分布の広さから《きざし》を古形と考えた。

の文献例が挙がっている。方言の例には、

- (10) 富山県砺波 398 福井県南条郡 442 大阪市 638 兵庫県赤穂郡 661 加古郡 664 奈良県 678 鳥取県 711 西伯郡 718 島根県八束郡・隠岐島 725 岡山県 762 大分県 941 ◇はしし 奈良県 679 岡山市 762 鹿児島県奄美大島 975 種子島 979 沖縄県 990 首里 993 ◇はじき 大分県南海部郡 038 北海道郡 941 ◇はじん 島根県隠岐島 725 ◇はびし 和歌山県「はびしゃたたん（どうもできない）」690 ◇はちし 沖縄県竹富島 996 ◇はちつい 沖縄県与那国島 996 ◇ばちし 沖縄県小浜島 996 ◇ばじし 鹿児島県喜界島 983 ◇ばさし 沖縄県石垣島・鳩間島 996 ◇はごしし 奈良県 675

が挙がっている（10: 1095。下線は筆者）。和歌山県に「ハビシ」があり、《はじし》>「ハビシ」とすれば、/zi/ > /bi/ の音変化は想定しがたいため<sup>14</sup>、P-S-S > P-P-S という変化であり、「A-B-B > A-A-B」の例に加えることができる。

また、南琉球宮古方言には、「歯茎」の意味の語として、池間 hadzĩsĩ、与那覇 pazĩsqĩ、上地 p̄asi:si、来間 p̄asi:sĩ、伊良部 p̄asĩ:sĩ のように、《はじし》に対応する形式が広く見られる一方、狩俣 p̄abasĩ、島尻 p̄abas(ĩ)、砂川 p̄abas(ĩ)、保良 p̄apasĩ のように「ハバシ」《はばし》に対応する形式も見られる（木部編 2012）。《はじし》>《はばし》という「A-B-B > A-A-B」の変化の一例と思われる<sup>15</sup>。

## 2-3. 「氷柱」《つらら》

《つらら》は古くは「氷」を指し、後に「氷柱」を指すようになった。「日国」の「つづら」には、

- (11) ①つらら。【つづら】山形県最上郡・東田川郡 139 新潟県佐渡 350 長野県東筑摩郡・上伊那郡 469 静岡県 521 三重県志摩郡 585 北牟婁郡 601 広島県 054 香川県 829 福岡県糸島郡 051 熊本県阿蘇郡・玉名郡 919 ◇ちらりん 三重県名張市 585 ◇ちろりん 岡山県邑久郡（児童語）761 広島県 771 ◇ちんがらりん 京都府加佐郡 629 ◇ちんちら 広島県佐伯郡・安佐郡 054 ◇ちんちろ 広島県安佐郡・賀茂郡 054 ◇ちんちろり 広島県賀茂郡 054 ◇ちんちろりん 広島県 054 香川県広島 054 ◇つーとーろ 茨城県稲敷郡 188 ◇つずれ 静岡市 521 ◇つつら 長野県下伊那郡 469 広島県賀茂郡・江田島 054 山口県玖珂郡 800 ◇つとら 茨城県行方郡 188 ◇つとろ 茨城県北相馬郡 195 ◇つぶら 香川県高見島 829 ◇つらさ 高知県幡多郡 870 ◇つらさん 千葉県夷隅郡 040 ◇つららこ 広島県賀茂郡 054 ◇つららん 京都府何鹿郡 徳島県美馬郡 054 ◇つらり 栃木県安蘇郡・上都賀郡 198 群馬県多野郡 040 埼玉県秩父郡 251 奈良県吉野郡 687 ◇つらりん 三重県名張市 585 広島県 054 ◇つられ 香川県 829 ◇つるり 広島県安佐郡・広島市 054 ◇つるりん 広島県安佐郡・豊田郡 054 ◇つるる 神奈川県津久井郡 012 ◇つろりん 広島県安佐郡・賀茂郡 054 ◇つろろ 茨城県新治郡 188 広島県能美島・江田島 054 ◇つんつら 兵庫県三原郡 671 ◇つんつらりん 広島県安佐郡・安芸郡 054 ◇つんつるりん 広島市 054 ◇つ

<sup>14</sup> ただし、シ>ヒは音変化として有り得るため、[シシ]>[ヒシ]が連濁と独立して起きた可能性もある。「蟻」の方言形[キビス]も考慮すると、《はじし》>\*ハシジ>\*ハヒジ>ハビシのような変化が起きた可能性もあるかもしれない。

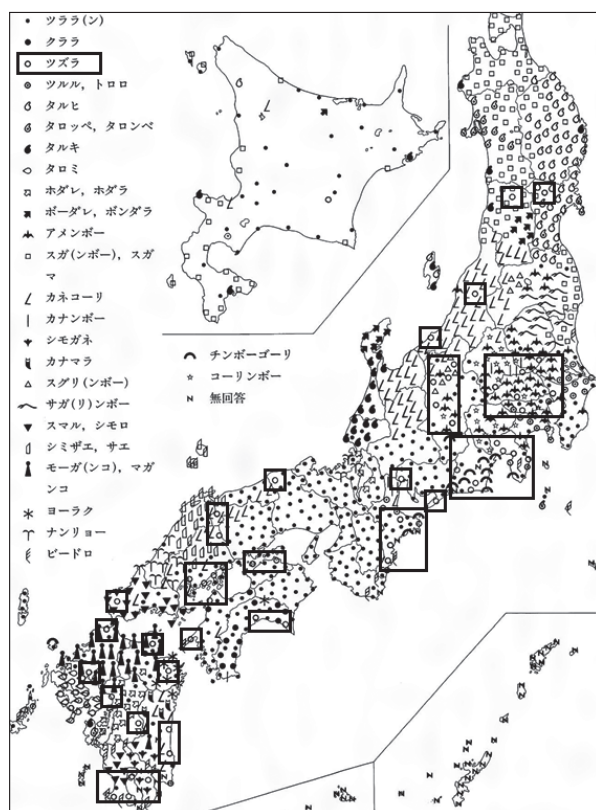
<sup>15</sup> ただし、《はばし》が「歯」と「端」《はし》からなる複合語だとすれば、P-S-S > P-P-S とは見せなくなる。



んつろり 広島県安佐郡 054 ◇つんつろりん 広島県広島市・安佐郡 054 ◇ところ 千葉県山武  
 郡 261 ◇ととろろ 千葉県香取郡 267 ◇とるる 神奈川県高座郡 ◇ところ 千葉県印旛郡 054  
 ◇とろろ 千葉県 269 271 275 ◇とろろー 下総※020 ◇とろんべ 熊本県天草郡 919 ②樹氷。  
 【つづら】静岡県駿東郡 012 ③地面に張った氷。埼玉県秩父郡 251 ◇つつら 長野県諏訪 468

が挙げられている (9: 378。下線、点線は筆者)。いくつかの地点で《つづら》のように第2子音が  
 /z/や/c/になっている。これは、C-R-R>C-C-R という変化と見なすことができ、「A-B-B>A-A-B」の  
 一例に加えられる可能性がある。ただし、/z/と/t/は音的に近く、またかなりの地域で《つづら》の  
 類が見られる (図2) ことから、あえて「A-B-B>A-A-B」の音変化と見なす必要はないかもしれな  
 いが、母音も連動して/u/-/a/-/a/ > /u/-/u/(-/a/) と変化しており、「A-B-B>A-A-B」の例と考えたい。

図2 《つづら》の分布 (佐藤 2002: 7 より一部加工)



## 2-4. 「鵲」《かもめ》

「鵲」を《かごめ》のようにいう方言は多い。古くは《かまめ》といったようで、「日国」には

(12) \*万葉集 (8C 後) 一・二「国原は 煙立ち立つ 海原は 加万目 (カマメ) 立ち立つ <舒明天皇>」

の例が挙がっている (3: 967)。一方で、《かごめ》は「日国」によれば、

(13) \*物類称呼 (1775) 二「鵲 かもめ〈略〉土佐国にてかごめ共いふ」

の文献例が初出のようであり (3: 540)、江戸時代まで見られないようである。「日国」の「かもめ【鵲】」には〈なまり〉として、

(14) カーゴメ〔富山県・志摩〕カガメ〔福井大飯〕カグメ〔長崎・島原方言・鹿児島方言〕カグメ  
〔壱岐続〕カゴベ〔岩手〕カゴメ〔伊豆大島・石川・福井大飯・静岡・南知多・志摩・南伊勢・  
紀州・和歌山県・鳥取・島根〕カゴメ〔岩手・仙台方言・秋田〕カッメ〔鹿児島方言〕カブメ  
〔八丈島〕カマメ〔鳥取・島根〕カモ〔島原方言〕カンゴメ〔和歌山県〕ゴベ〔津軽語彙〕ゴメ  
〔津軽語彙・津軽ことば〕

が挙げられており (3: 1028。下線は筆者)、《かごめ》は東北から九州まで広く分布することから、あるいは《かもめ》より古いかとも思われるが、《かごめ》の方が古いとすると、<sup>\*</sup>カモゲのようなメタテシスが生じた形が全く見られないのは不可解である<sup>16</sup>。〔カブメ〕を含む八丈島の方言形<sup>17</sup>は《かもめ》からの変化と考えた方が良い<sup>18</sup>ことから、《かもめ》の方が古く、《かごめ》は K-M-M > K-K-M と変化した形と考えたい。/m/~/g/ (ŋ/) は通常の音変化とも考えられる<sup>19</sup>が、メタテシスを除いて /m/ と /g/ の交替がほとんど見られないことも A-B-B > A-A-B の変化を支持する。

## 2-5. 「桑の実」《どどめ》

「桑の実」の方言形として、「ドドメ (群馬県、埼玉県、東京都、神奈川県)、フナメ (福井県、京都府、兵庫県)、ツナミ (岐阜県、長野県)、ツバメ (富山県、石川県、福井県)」などがある (大西

<sup>16</sup> メタテシスとは、「語の中に起こる音の転置現象」(『言語学大辞典』6: 1338) で、チャガマ〜チャマガ「茶釜」、ギリシア \**τυκτω* > *τυκτο* 「生む」などの例が知られている。「たまご【卵】」のタガモ〔石川・福井大飯・信州風物・飛騨〕(「日国」8: 1105)、「つぐみ【鶺鴒】」のツムギ〔石川・岐阜・大阪・淡路・大和・鳥取〕ツモギ〔石川〕(同 9: 308)、「よもぎ【蓬】」のヨグミ〔和歌山県〕ヨゴミ〔秋田・秋田鹿角・福井・福井大飯・岐阜・飛騨・伊賀・大阪・神戸・播磨・大和・紀州・和歌山県・鳥取・島根・讃岐・土佐・瀬戸内〕ヨゴミ〔青森・津軽語彙・岩手・秋田〕(同 13: 698) のように、/m/ と /g/ はよく入れ替わる。

<sup>17</sup> 八丈島には他に《かぶな》、《かぶなめ・かぶめ》、《かぶにゃあめ》の形式もある(「日国」3: 929)。山田 (2010) には、三根・大賀郷・末吉・鳥打・宇津木カブナメ、榎立カフニヤメ、中之郷カブニヤメの方言形が挙げられている (p. 62-63)。

<sup>18</sup> 八丈島の諸形式は《かぶな》になっているから、《かもめ》>\*カボメの異化(異化とは、「同一ないし類似した音が言連鎖の中で隣接ないし近接した場合に、一方が他方とは異なった音に変わる現象」(『言語学大辞典』6: 34) のことである)の後、\*カボメ>\*カブネを経て成立したと考える。八丈島では /m-m/ > /b-m/ という調音法の異化が生じたと考える。八丈島における /m/ > /n/ は他に《みみず》に対する榎立・中之郷〔ネズメ〕(山田 2010: 62-63) などがあるが、これは /m-m/ > /n-m/ という調音点の異化と思われる。《かもめ》>《かごめ》も、あるいは /m-m/ > /ŋ-m/ (g-m/) の異化の結果かもしれない。

<sup>19</sup> 例えば、「日国」には「かぐ【嗅】」の〈なまり〉に「カム〔津軽語彙・津軽ことば・岩手・秋田・仙台音韻・仙台方言・福島・茨城・栃木・埼玉方言・千葉・愛知・土佐〕」(3: 419) が挙げられているが、動詞の語幹末子音という特殊な環境であり、「しぬ【死】」の〈なまり〉にシゲ〔岩手・秋田・仙台方言〕シグ〔山形・福島・茨城・栃木・埼玉方言・新潟県・山梨・石川・福井・信州読本・信州風物・静岡・志摩〕シム〔栃木・埼玉方言・千葉・神奈川・新潟県・信州読本・静岡〕シグ・スグ〔福島〕スグ〔岩手〕スム〔岩手・千葉〕(同 6: 923) が見られるのと類似の現象と思われる。また、「卵」のタマモ〔富山県・福井大飯・飛騨〕タモモ〔岐阜・飛騨〕(同 8: 1105) や「つもごり【晦・晦日】」(<「つごもり」)の方言「◇つももり 奈良県 681【中略】◇つもも 岐阜県飛騨 502」(同 9: 454)、「蓬」のエムミ〔岩手〕ヨモミ〔大和〕(同 13: 698) などでは /g/ > /m/ が見られるが、いずれも前後の /m/ への同化であり(同化とは、「言語音の連鎖の中で、ある音が隣接する音に影響されて類似の音に変わる事」(『言語学大辞典』6: 977) である)、《かごめ》>《かもめ》は有り得てもその逆は支持されない。しかし、《かごめ》>《かもめ》とすると、「卵」、「晦日」、「蓬」の /g/ > /m/ より広い地域に起こりすぎている。



編 2016: 16)。「日国」には、《どどめ》は「がまずみ(莢)」の異名とある。「がまずみ」は「がま」と「ずみ」の複合語だろう。この「ずみ」は古語の《つみ》に対応すると思われる。「日国」の「つみ【柘】」には、

- (15) (後世は「づみ」) 植物「やまぐわ(山桑)」の古名。 \*万葉集(8C 後) 三・三八六「この夕柘(つみ)のさ枝の流れ来ば梁は打たずて取らずかもあらむ(作者未詳)」 \*享和本新撰字鏡(898-901 頃)「槩 山桑 豆彌」 \*十卷本和名類聚抄(934 頃) 一〇「柘 毛詩注云桑柘(音射漢語抄云豆美)蚕所食也」 \*大和本草(1709) 一〇「柘(のぐは) 順和名に、づみと訓す。俗に野桑と云」

として、「山桑」の意の《つみ》(づみ)があったことが分かる。《どどめ》は、「づみの実」として「\*づみみ」あるいは「\*づみのみ」という語を再建し、「\*づみ(ん) み>づづみ>どどめ」と変化して生じた形式ではないか。

[フナメ]、[ツナミ]、[ツバメ]なども《どどめ》と関連がある語と思われるが、祖形の「\*づみみ」から、「づみみ>づメメ>づマメ>ツバメ」、「づみのみ>ヅンナミ>ツナミ」、「づみみ>ツマメ>スマメ>フナメ」のように変化してそれぞれ成立したのではないか。「づメメ>づマメ」は「豆」への類推が働いたかもしれない。また、「スマメ>フナメ」では、子音の調音点が入れ替わる S-M>F-N というメタテシス<sup>20</sup>が起きたと思われる。

## 2-6. 「陶磁器・播鉢」《からつ》

「陶磁器」や「播鉢」を《からつ》などという方言が西日本を中心に見られる(『日本言語地図』第161図、162図)。《からつ》は「唐津物」の意で、この《からつ》が転じたと思われる[カガツ]、[カガス]のような形式が、やはり西日本各地に見られる。「日国」には、「からつもの【唐津物】」の方言として、

- (16) 陶器。瀬戸物。◇からつもの 中国†124 富山県射水郡 394 石川県 418 兵庫県 650 鳥取県西伯郡 054 島根県 725 広島県安芸郡 054 比婆郡 774 香川県 829 愛媛県 845 846 高知県 862 熊本県阿蘇郡・球磨郡 919 大分県 941 ◇からちもの 島根県瀬摩郡 725 ◇かなつ 富山県東礪波郡 402 ㊦すり鉢。◇からちもの 島根県瀬摩郡 725 ◇かがす 島根県隠岐島 741 香川県三豊郡 829 愛媛県 840 喜多郡 845 ◇かがし 香川県三豊郡 829 ◇かがち 島根県 723 山口県見島 797 豊浦郡 798 香川県三豊郡 054 仲多度郡 829 ㊧壺(つぼ)。水がめ。◇かがす 大分県 939 ㊨小鉢。◇かなつ 富山県東礪波郡 402

が挙げられている(3: 1086)。また、「かがつ」の項目には、

<sup>20</sup> 「帯」の方言形について、南琉球宮古方言のうち、長浜 sukubi《しこび》に対する狩俣 sipugi《しほぎ》のように、子音の調音点のみが入れ替わるメタテシスも存在する(ローレンス 2003: 246)。

- (17) 『名』 すりばち。＊物類称呼 (1775) 四「摺鉢 すりばち 江戸にて、すりばち〈略〉山陽道及四国にて、かがつ」方言 ①すり鉢。◇かがつ 出雲†120 鳥取県西伯郡 718 島根県 723 広島県 771 山口県 792 大島 801 徳島県美馬郡 811 香川県 829 愛媛県 840 大分県 941 宮崎市 955 ②壺(つぼ)。水がめ。◇かがつ 大分県西国東郡 939

が挙げられている (3:348)。この《かがつ》は、《からつ》>\*カザツ>《かがつ》と転じた可能性がある。すなわち、(K-R-C>) \*K-C-C>K-K-C のような「A-B-B>A-A-B」の変化が想定される。しかし、中間に想定される\*カザツが実際には確認されない点、疑問が残る。《かがつ》は「摺鉢」の意にほぼ限られており、あるいは「陶磁器」の《からつ》とは別の語の可能性もある。

### 3. 「A-B-B>A-A-B」の音韻論的解釈

前節で、「A-B-B>A-A-B」と見られる変化の例を検討した。その中には、「A-B-B>A-A-B」と考えるべきもの(《きざさ》、《はじし》)や、可能性にとどまるもの(《つらら》、《かもめ》)、再建に基づく仮想的なもの(《どどめ》、《からつ》)がある。「海胆」は《きざさ》、《はじし》に、「山羊」は《どどめ》、《からつ》に準ずる。少なくとも、《きざさ》、《はじし》、《かすす》に基づいて、「A-B-B>A-A-B」の音変化は認めてよいと考える<sup>21</sup>。本節では、「A-B-B>A-A-B」の音韻論的解釈を試みる。

#### 3-1. 重複音素 “R” による解釈

「A-B-B>A-A-B」の変化は繰り返し部分が入れ替わっていることから、メタテシスの一種と考えられる。ローレンス (2019: 104) に倣い、重複を “R” で表すと、《きひびす》> [キキビン] は

$$\begin{array}{ccccccc}
 (18) & k & i & p & i & R & s & u & > & k & i & R & p & i & s & o \\
 & & & & & | & & & & & & | & & & & \\
 & & & & & [+濁] & & & & & & [+濁] & & & & \\
 & [k & i & p & i & b & i & s & u] & & [k & i & k & i & b & i & s & o]
 \end{array}$$

と書ける。この “R” は直前のモーラをコピーする「音素」と分析できる。固定した音価を持たない点で、特殊音素の撥音「ン」/N/、促音「ッ」/Q/、引き音「ー」/R/ (沖森 2017) に似た性質を持つと言える。同様に、「菌莖」《はばし》、「氷柱」《つづら》、「桑の実」《どどめ》はそれぞれ、

$$\begin{array}{ccccccc}
 (19) & p & a & s & i & R & > & p & a & R & s & i \\
 & & & & & | & & & & | & & \\
 & & & & & [+濁] & & & & [+濁] & & \\
 & [p & a & z & i & s & i] & & [p & a & b & a & s & i]
 \end{array}$$

<sup>21</sup> ただし、[キキビン] が 4 音節なのに対し、他の例は全て 3 音節という違いがある。この違いは変化の起こりやすさに関わっていると言え、[キキビン] が淡路にしか見られないのは、{キヒ}{ビス} のようなフット構造が、3 音節の {ABB} ~ {AAB} と違って変化を妨げるためと考えられる ({オサ}{ワガセ} ~ {オサ}{ガワセ} と {ヒト}{サワ}{ガセ} など参照)。

- (20) c u r a **R** > c u **R** r a > c u **R** r a  
 |  
 [+濁]  
 [c u r a r a] [c u c u r a] [c u z u r a]
- (21) t u m i **R** > t u **R** m i > t o **R** m e  
 | | |  
 [+濁] [+濁] [+濁]  
 [d u m i m i] [d u d u m i] [d o d o m e]

のように表せる<sup>22</sup>。「海胆」《かかす》、「山羊」《ひひち》も同じように“**R**”のメタテシスで表せる。

一方で、「A-B-B>A-A-B」の類似の変化には、子音のみが変化する例もあった。《きざし》>《きがし》や《はじし》>《はびし》の変化は、モーラ単位での“**R**”によるメタテシスでは説明できず、子音のみの独立した変化を想定する必要がある。従って、本稿は“**R**”による解釈を採用しない。

### 3-2. 無指定音素“**X**”による解釈

音変化には、母音を無視して子音のみに起きる変化や、子音を無視して母音のみに起きる変化がある<sup>23</sup>。「A-B-B>A-A-B」の変化に関わる部分では、子音が無指定であると考え、仮にこの要素を“**X**”で表すと、《きざし》>《きがし》は、

- (22) — i — a — i — i — a — i  
 k — s — **X** — > k — **X** — s —  
 | |  
 [+濁] [+濁]  
 [k i z a s i] [k i g a s i]

と表現される。母音は子音とは独立した層にあるため変化は生じない。また、濁音の指定位置も変わらないことから、子音の層とは独立していると考えなければならない。

この“**X**”は子音として発音されるから、子音が「ない」ことを表すわけではなく、「直前の子音をコピーせよ」という指定が「ある」と考えなければならない。

- (23) — i — a — i  
 k — s — **X** — ≠ kisa\_i

<sup>22</sup> 厳密は、(21)は[dumimi]>[dutumi]>[dotome]となってしまうため、(20)と同様に[+濁]が添加されるか、[+濁]が次音節にも拡張され则认为る必要がある。

<sup>23</sup> 前者の例にはグラースマンの法則（『言語学大辞典』6:311-313）など有名で、後者の例にはゲルマン語に起きたウムラウト（同上:111-112）などがある。

しかし、もしそうであるとする、特定の子音を指定するのと機能上の負担は変わらないことになってしまい、わざわざ “X” を設定する必要はないに等しい。

$$(24) \begin{array}{ccccccc} \text{—} & \text{i} & \text{—} & \text{a} & \text{—} & \text{i} & \\ \text{k} & \text{—} & \text{s} & \text{—} & \text{X} & \text{—} & \end{array} = \text{kisasi} = \begin{array}{ccccccc} \text{—} & \text{i} & \text{—} & \text{a} & \text{—} & \text{i} & \\ \text{k} & \text{—} & \text{s} & \text{—} & \text{s} & \text{—} & \end{array}$$

“X” は「A-B-B>A-A-B」の音変化を説明するために導入した単位ではあるが、そのためだけに機能がほとんどない音素を設定するのはあまりにもアド・ホックである。

### 3-3. 空のスロット “□” による解釈

3-2 の “X” を本稿では「空のスロット」ととらえなおし、「スロットがあるだけで中に何も無い場合、直前の音をコピーする」という規則があると考え。今、空であることを強調するために、“□” に表記を改めると、

$$(25) \begin{array}{ccccccc} \text{—} & \text{i} & \text{—} & \text{a} & \text{—} & \text{i} & \\ \text{k} & \text{—} & \text{s} & \text{—} & \square & & \end{array} = \text{kisa}\square\text{i}$$

と書ける。(25) では、空の “□” の左にある/s/が規則によって自動的に補われることになる。

これに対し、kisasi のように子音がない (kisa\_i) 場合は、

- (26) a. ゼロ子音音素 /ʔ/ がスロットにある  
b. 子音のスロット自体が存在しない ( / )

に対応すると考える。すなわち、母音が連続する  $V_1V_2$  の場合、 $V_2$  の前に「ゼロ子音」がある ( $V_1[\text{ʔ}]V_2$ ) か、もしくは  $V_2$  の前に子音のスロット自体が存在しない (二重母音または長母音) と見なす。

「子音がないことを指定する」というのは一見奇妙だが、/h/に対応する有声音として日本語の母音音節にはしばしば /ʔ/ が設定される (服部 1979: 173) <sup>24</sup>。本稿もその立場に立ち、暫定的に次のように解釈する。

$$(27) \begin{array}{ccccccc} \text{—} & \text{a} & \text{—} & \text{i} & & \text{—} & \text{a} & \text{—} & \text{i} & & \text{—} & \text{a} & \text{—} & \text{i} \\ \text{k} & \text{—} & \square & \text{—} & = & \text{kaki} & \text{k} & \text{—} & ' & \text{—} & = & \text{ka'i} & \text{k} & \text{—} & / & \text{—} & = & \text{kai} \end{array}$$

(27) はそれぞれ「牡蠣」、「下位」、「貝」に対応する。同じ層において同種の音の連続を禁止する OCP (obligatory contour principle : 義務的起伏原理) からすれば、/kaki/ の第 2 子音に空のスロットを

<sup>24</sup> 厳密に言えば、ゼロフォネームの /ʔ/ と有声子音音素の /ʔ/ では音韻論的な位置づけが異なる (服部 1979: 348–349)。ここでは後者に近い立場をとり、/ʔ/ を積極的な子音音素と位置付ける。

トへ〇

#### 4. まとめと課題

## 類型の

- (28) a.

(28a)

- (29) s

「空」

- (30) —

(28b)

<sup>25</sup> 完全

## 謝辞・付記

2020年1月31日に「キキピソ考—方言からみえる音変化の一類型—」と題し、埼玉大学大学院・人文社会科学研究所第7回リベラルアーツ研究セミナーで口頭発表する機会があり、出席者から有益なコメントをいただき、いくつか本稿に反映させることができた。お礼申し上げる。

本稿はJSPS科研費「淡路方言の系統の解明と西日本方言の区画の再検討」(研究課題番号19K20801)の成果の一部である。

## 本稿における記号

□ : カタカナによる表音的簡略音声表記

《 》 : ひらがなによる語形の表示 (必ずしも表音的ではない)

> : 通時の変化 (「A>B」は古形Aから新形Bに歴史的に変化したことを表す)

× : 存在が確認できない形式 (再建形の \* とは異なる)

## 参考資料

- 大西拓一郎 編 (2016) 『新日本言語地図 分布図で見渡す方言の世界』 東京: 朝倉書店.  
亀井孝・河野六郎・千野栄一 編著 (1995) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』 東京: 三省堂.  
国立国語研究所 編 (1966-1974) 『日本言語地図 第1集-第6集』  
佐藤亮一 監修 (2002) 『お国ことばを知る方言の地図帳—新版 方言の読本』 東京: 小学館.  
小学館国語辞典編集部 編 (2000-2002) 『日本国語大辞典 第二版』 東京: 小学館.  
—— 編 (2005-2006) 『精選版 日本国語大辞典』 東京: 小学館.  
斎藤純男・田口善久・西村義樹 編 (2015) 『明解言語学辞典』 東京: 三省堂.

## 参考文献

- 興津憲作 (1990) 『淡路方言—特徴・語法・アクセント・語彙』 旧津名郡一宮町: 兵庫県立淡路文化会館.  
沖森卓也 編著 (2010) 『日本語史概説』 東京: 朝倉書店.  
—— 編著 (2017) 『日本語の音』 東京: 朝倉書店.  
木部暢子 編 (2012) 『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 南琉球宮古方言調査報告書』 立川市: 国立国語研究所.  
田中萬兵衛 (1934) 『淡路方言研究』 旧津名郡洲本町: 福浦藻文堂書店.  
服部四郎 (1979) 『新版音韻論と正書法』 東京: 大修館書店.  
松本修 (2018) 『全国マン・チン分布考』 東京: 集英社.  
山田平右エ門 (2010) 『消えていく島言葉—八丈語の継承と存続を願って—』 東京: 郁朋社.  
ローレンス・ウエイン (2003) 「多良間方言の系統的位置」『世界に拓く沖縄研究』 238-247.  
—— (2006) 「沖縄方言群の下位区分について」『沖縄文化』 100: 101-118.  
—— (2019) 「竹富島方言アクセント (2)」『琉球の方言』 43: 97-129.